

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02863

研究課題名(和文)大学の英語開講授業とキャンパスアジアにおけるトランス・ランゲージングの実態と活用

研究課題名(英文)The use of translanguaging in university English-medium education and Campus Asia Program

研究代表者

湯川 笑子(YUKAWA, EMIKO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：30309075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：大学の英語開講科目(EMI)では日本人学生が困難を抱えていた。担当教員のトランス・ランゲージング(TL)はおおいに助けになっていたが授業内でのTLは多くなかった。学生がEMI科目をこなせるように教師はTL以外にも多様な教授ストラテジーを使用していた。そのうち汎用性のある40を抽出してハンドブックとした。日中韓を移動する立命館キャンパスアジア・プログラム(CAP)では、3言語が対等の立場にあり3言語話者が共修することから、学生間で必然性、積極性、多様化を特徴とする盛んなTLが行われていた。これらの先輩学習者の実態を含め、多言語学習についてのメタ認知を高めるためのハンドブックを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多言語話者が自分の全ての言語と非言語リソースを用いて意思疎通をするトランス・ランゲージング(TL)が教授上・学習上の選択肢を豊かにすることを明らかにした。英語開講科目を日本人学生にも乗り切らせるための教授ストラテジーを選び、その根拠を添えて冊子にまとめた。キャンパスアジア・プログラム生の研究をもとに多言語同時学習を支援する学習ハンドブックを作成しCAPのウェブページで公開した。

研究成果の概要(英文)：Japanese students were having difficulties in English language courses (EMI) at a university. Translanguaging (TL) by the instructor helped a lot, but TL was not often observed in class. In addition to TL, teachers used a variety of teaching strategies to help students cope with EMI courses. Forty of the strategies identified as versatile were extracted and compiled into a handbook. In Ritsumeikan Campus Asia Program (CAP), students move between Japanese, Chinese, and Korean campuses. Because the three languages are on equal footing and speakers of all languages are taught in the same class, there was a thriving quantity of TL. The CAP students' TL was characterized by inevitability, proactivity, and enrichment among students. A handbook was developed to increase the metacognition of multilingual learning, including the actual state of these predecessors.

研究分野：英語教育、バイリンガル教育

キーワード：トランスランゲージング 英語科目開講(EMI) キャンパスアジア・プログラム 多言語教育 バイリンガル教育 大学言語教育 教授ストラテジー 言語学習ストラテジー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の申請文書を作成していた2015年には、大学の国際化を牽引するプロジェクトとして文部科学省が推進した「国際化拠点整備事業(グローバル30、大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業)」(2009年度採択)が実施され、英語で大学教育を行う学部や研究科の存在が広く知られるようになっていた。世界でも、英語圏の大学ではないのに英語のみで学習し学位が取得できるプログラムが続出し、英語開講授業(English-Medium Instruction、以後EMIと呼ぶ)についての研究も数多く発表された(Doiz, Lasagabaster, & Sierra, 2013; Manakul, 2007; Vila & Bretxa, 2014)。日本においても自分の母国にいながらにして大学教育を英語で受けることへの関心が高まっていた。

文部科学省の補助金による大学教育の国際化は英語圏の国や英語を媒介として実現されるケースばかりではなく、アジア、ロシア、インド、アフリカ諸国を含む世界の国々と交流する事業が展開され(「平成23年度大学の世界展開力強化事業」)、本研究を行った研究者3名が所属する立命館大学では、この補助金を得て、日本、中国、韓国の3か国でキャンパスを相互に移動しながら日中韓の3言語を伸ばし、3か国の文化に理解を深める「立命館キャンパスアジア・プログラム」を実践していた。すでにパイロットプログラム(2011-2015年)が終了し、2016年度から常設化キャンパスアジア・プログラム(以後CAPと呼ぶ)が始まるようとしていた。EMIもCAPも多言語を育成し、多言語化している社会で生き抜くためのコミュニケーション能力を育むことが非常に重要な要素となるプログラムである。

他方、多言語化する社会情勢を反映し、また言語教育・言語分析研究の進歩によって、応用言語学では授業の中で積極的に複数の言語を使用する「トランス・ランゲージング(言語境界線超越使用、以後TLと呼ぶ)」という概念が生まれ(William, 1996)、2010年以降に特にその概念が広まり多言語教育の手法としての研究やその正当性を説く理論面での論考が数多く発表されていた(Baker, 2006; García & Li, 2014; Otheguy et al., 2015)。日本においても母語・継承語・バイリンガル教育研究会がTLについて招待講演やシンポジウムを行い、概念紹介の論文(加納2016)も出版され、日本の大学のグローバル化につながる言語教育を分析、促進するのにより理論的切込み口だと思われた。TLがコード切り替えとどう違って、教育現場でこの概念をどう生かしていったらいいのか等わからないことは多々あったが、多言語話者をとらえる時にキーになる概念であると考え、この視点から2つの教育実践を分析しようと考えた。

## 2. 研究の目的

TLとは、複数言語使用者が全ての言語を自然にかつ創造的に使用することを認め、教授法としても戦略的に使おうとする概念である。本研究では日本の高等教育機関で複数の言語が関与し得る教育現場でTLがどのように使用されているのかの実態と意義を明らかにし、その知見に基づいてTLの効果的な使用法を明らかにしたいと考えた。その際に、英語開講科目(英語と学習者の母語が関与)におけるTLと立命館大学の「キャンパスアジア」プログラム(日中韓の学生が3つのキャンパスを移動して3言語で学ぶプログラム)の履修生のTLを同時に研究することで、大学のグローバル化に不可欠な複数言語使用の教育においてバイ(マルチ)リンガルの強みを生かした最善の教育方法を探ろうとした。

## 3. 研究の方法

(1) TLは現象的にはコード切り替えと似ている。また、理念的には、個別に命名された語という枠組みを認めないことから難解であり、批判的に受け止められる部分もある。したがって、このTL理論を丁寧な文献の読み込みによって検討し、社会的・政治的なコンテクストを踏まえて、日本への教育分野でこの概念をどう解釈すればよいのかを探った。

(2) 英語開講授業については、前述したように多くの研究が発表されていることから、一般的な大学生の英語力がまだあまり高くない日本でEMIの裾野を広げるために参考になる文献を検討して研究の土台とした。協力が得られるEMI授業科目の履修学生、つまり、日本語を媒介として授業を受ける学生(主に日本人、以後「日本語規準学生」と呼ぶ)と英語を媒介として授業を受ける前提で入学してきた学生(主に留学生、以後「英語規準学生」と呼ぶ)の双方から英語開講科目の受講に関する理解度、取り組み方、TLに関する態度などを質問紙によって探った。担当教員にもインタビューした。

(3) EMI授業のうち、英語力が不十分であると(観察によって)思われる学生に対しても授業理解と参加が可能になるよう工夫を凝らしている授業を2科目1学期にわたって観察し、そこで使用されていた教授ストラテジー(TLを含む)を抽出した。学生にもEMI授業に対する取り組

みや思い、教師のストラテジーについての効果についてインタビューを行った。

(4) CAPについては、CAPの常設化の1期生(2016年度入学生)の日中韓のプログラム参加者について学期ごとの質問紙調査で言語力と言語使用の状況を探った。さらに、学生にはフォーカスグループの手法で聞き取りをし、TLを含むCAPの生活の実態、意義、学んだことを聞き取った。

(5) 上記(3)をもとに、英語力が十全ではない日本語規準の学生を含むEMI科目を担当する教師のために、日英両言語でEMIハンドブックを作成した。また(4)をもとに、多言語学習をする人へのハンドブックを作り、TLを含む言語学習のメタ知識、先生の助言、先輩のロールモデルの提示によって言語学習を促進する手立てとした。

#### 4. 研究成果

(1) TLの概念を吟味した結果は湯川・加納(2021)「『トランス・ランゲージング』再考 その理念、批判、教育実践」と題した論文にまとめた。TLの提唱者たちによればこの概念は、意味生成・理解のプロセスを指す「ランゲージング」という概念とそれに含まれる多モダリティ(=嗅覚・聴覚・触覚などの五感を介した伝達手段)を不可欠な要素とする(Li, 2018)。また、そのようなTLを日常的に行う多言語話者は、リソースとして使用する言語にいわゆる個別に命名されている「言語」という区分を持たず、「単一言語システム」を持つとする(Otheguy, et al., 2015)。これらの点でTLはコード切り替えとは異なる。また、TLが理想的に単一言語主義をとることでマイノリティの母語使用の解放を可能にし、その点でTL以外の類似の概念とは一線を画するとする。

しかし、TLはその「単一言語システム」という考え方自体に問題を有しておりそのために多言語話者の支援のツールとしても不備があるとの批判(MacSwan, 2017, 2020)を受けたり、TLという用語が広がりとともに変化して教育の改革を伴っていないという分析(Poza, 2017)がなされたりなど多くの議論を生んでいる。さらに、状況によっては教育現場での無制限なTLでは弱い方の言語が守れないので運用に留意すべきだとの指摘もある(Cenoz & Gorter, 2017)。

ただ、TLをタイトルに含む2015年以降に発表された教育実践研究92件を吟味してみると、言語マイノリティの母語の地位向上に資する実践や、イマージョン教育や大学の外国語教育においてすら、TLが多言語話者の実態であることを認めて有効に活用する教育が展開されていた。

TLの理論的な組み立てについてはさらに今後議論が続くことが予想されるが、少なくともこの概念が目の中の多言語学習者に対する見方を変えるパワーを有しており、それを期に教授法を見直し学習者のニーズに応じて選択肢を広げることにつながったと言える。

(2) 本研究では、特別な言語背景をもつバイリンガルにのみ開講されているプログラムではなく、一般の「日本語規準学生」が参加することを想定して開講されている学部横断型のEMI科目受講者に対して質問紙による量的調査を2度行った。1度目の研究はYukawa and Horie (2018)Local students' views of English-Medium courses in a Japanese contextとして出版した。この研究対象は日本語基準の学生に限定し、受講したEMI科目への見方、理解度と英語力他の要因との関係、将来またEMI科目を受講したいかどうかとEMIへの態度や言語力との関係について調べた。研究参加者は77名の少人数演習クラスと70名の講義クラスから成る(2015-2016年に関西のK大学でデータ収集)。演習科目と講義科目という科目の形態による影響も調べた。

総じて授業内容を理解しているかという問いについてはあまり理解度は高くなく、英語が向上したかについても評価はやや低い。英語学習への動機が高まったかについてはそう思うという評価が高い。これは先行文献の傾向と一致している。また、教師の母語使用には非常に助けられたという。EMI科目に対して苦労している様子が見えるのにもかかわらず、履修していた科目と同じ内容を母語である日本語で受講したいかEMIがいいかと問うと、EMIがよいとする傾向が強かった。演習クラスの学生は理解度、EMI科目受講への自信、EMI科目を選ぶ指向性の3項目において講義クラスの学生よりも有意に高いスコアを示した。授業の理解と相関が強いのは演習クラスも講義クラスもTOEICの点と宿題の達成度であって、母語のサポートを望むかどうかとは関係がなかった。またEMI科目の受講を望む気持ちは演習クラスも講義クラスも授業の理解度と中程度の相関を示したが、講義クラスの方はTOEICの点との相関の方がさらに強く、これは、小集団の演習クラスでは授業が双方向に対話的に進むことから様々な英語力不足を補う手立てを講じることができるからであろうと考えられる。

こうした結果を踏まえて2度目の研究(Yukawa (2020)Local and foreign students' views of English-Medium Instruction (EMI) and the use of multiple languages for learningとして出版)では、小集団の演習科目に特化し、日本語規準学生と英語規準学生が両方履修することが多い国際教養科目の受講者を対象とした。年度やクラスによる揺らぎを避けるため2016年度

と2017年度の2か年をかけて、関西のK大学で開講されたTheme Studyと総称された演習科目群の受講者を対象に質問紙調査を行った。今回は日本語規準の学生101名と英語規準で入学し普段から他の科目も英語で受講している学生75名から研究目的使用に賛同するデータを収集することができた。質問紙では学生のEMI科目履修についての思いとクラス内での多言語使用についての考えについて聞いた。

日常的に英語で科目受講することに慣れている英語基準学生に比べて日本語基準学生は大きく困難を抱えていることが明らかになった。それでもこのEMI科目受講によって英語学習の動機が高まったとし、同じ科目を日本語で受けるよりEMI科目として受講する方がよいという傾向が高いのは1度目の研究結果と同じであった。授業中の母語使用については、日本語基準学生はとて助けになったとし、英語基準学生もそれを否定的にとらえた回答は3件のみで、あとは自分にもメリットがあるとかそれで恩恵を受ける人があるのならいいことだなどと好意的な見方をしていることが分かった。自分の学びにTLを使うことの是非については、EMIのような科目の中での母語使用をするというコンテクストに当てはめて記述している回答が多く、否定的な回答よりも肯定的、あるいは条件付で肯定する回答が多かった。特に日本語規準学生の回答の中には、語学学習としてのモノリンガル主義のメリットを感じつつ認知能力の活用の点からは多言語がよいなどと、用途を考えた回答も見られた。これら、クラス内の母語使用に関する質問とTLに関する質問に対しては、特に2017年度は無回答も多く、この年度の13クラスの多くのクラスにおいて日本語を使用することが皆無であった可能性が高い。

先行文献によると、EMIクラスはそれぞれの国の制度によって対象とする学生や科目の位置づけなどの要因が異なり、そのために現地語の使用頻度は様々である。今回のクラスは選択科目であり、教員側も全て英語で実施するという認識で授業に臨んでいることから、TLの使用頻度は低く、そのような状況下での稀に起こるTLはおおむね好意的にみられていたことが判明した。

(3) 英語基準学生も同席するEMI授業では、英語力が不十分な日本語基準学生に対してTLは支援の一部を構成するがさほど比重は高くないことが判明した。したがって、上記の研究時に行った授業観察や担当教員への聞き取りを通して授業理解と参加が可能になるよう工夫を凝らしていた授業を2科目選び、1学期全てにわたって観察することを通してその(TLを含む)教授ストラテジーを抽出した。

その結果は学会発表や教員FDの研修資料として使用し、最終的に湯川(2022)『EMIハンドブック 初めてEMI授業を受講する学生のために有効な40の教授ストラテジー』としてまとめた。困難を抱える日本語基準学生への支援として機能していた40の教授ストラテジーは、クラスマネージメント、心理的ケア、認知的スキュアフォーリング、言語的スキュアフォーリングという4つの種類のストラテジーに分けられるとし、実際の使用事例を掲載した。またハンドブックには、上記の研究結果の要約と、これらのストラテジーを観察できた授業を受講していた学生からの聞き取り結果も掲載した。困難を抱えていた学生の生の声といかに様々な教師のストラテジーが役にたったか、初めてのEMI授業の経験を得た後の今後の希望などについてまとめた。なおこのハンドブックは日本語と英語の両方を掲載した。

(4) CAPについては、CAPの常設化の1期生(2016年度入学生)の日中韓のプログラム参加者について学期ごとの質問紙調査で言語力と言語使用の状況を探った。3か国の学生に3言語の習熟度について、欧州評議会のヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)に準じてCAP用に作成した評価表に基づいて自己評価してもらった。言語使用に関しては移動キャンパスで日中韓の3大学間でそれぞれ2つの提携大学に2年生時と3年生時に1学期ずつ滞っている時に、8つの場面で何語(現地語、母語、その他の言語)を何パーセント使用しているのかを聞いた。さらに学年の終わりには学生にフォーカスグループの手法で聞き取りをし、TLを含むCAPの生活の実態、意義、学んだことを聞き取った。

この研究結果は、まず移動キャンパス1年目が終了した2年生の終わりの時点での成果を湯川・清田(2019)に、移動キャンパス2年目が終了した3年生の終わりの時点での成果を湯川・清田(2020)と湯川・清田(2021)に論文として発表した。

1期生で最後までCAPを継続した日本人学生14名は、3年生の終了時点で韓国語中国語ともに概ね中級レベルに達したと自己評価した。韓国語に比べて中国語が苦手だとする学生が多かった。韓国人および中国人学生は中級から上級のレベルに到達したと自己評価した。ただこれは、実際の言語力が日本人学生と差があったことに加えて、自国の大学が外国語を専門とする大学・学部であったこと、奨学金制度のしくみ、CAPプログラムと卒業要件の関係、自己評価に対する文化差などの違いも影響した結果であると考えられる。

移動キャンパス時の言語使用に関しては、休憩時や同国人の教職員と話す時以外は現地語を50%以上使用していたが、日本人の1グループ(CAP参加日本人学生の約半数)と韓国人の1グループ(CAP参加者の韓国人学生の約半数)は中国滞在期の現地語使用が少なかった。

フォーカスグループの手法で日本人学生に聞き取りをした結果、EMI授業参加時と異なり、CAPは3言語および3言語の母語話者が対等であり、3言語(および英語)が互いに通じあう学習者が

共修している現場であることから、非常に盛んなTLが起こる現場であったことが分かった。学生はTLをコミュニケーションのため(必然性)自分の学習のため(積極的)多言語話者の言語レパートリーを楽しむため(豊富化)のために使用していた。

(5)上の(3)で述べたようにEMIハンドブックを作成し、EMI授業を、TLを含め総合的な教授法の向上によって成功させるための資料にすべく日英両語で公開した。また(4)をもとに、多言語学習をする人へのハンドブックを作り、学生の言語学習を促進する手立てとした。

【結語】今回の研究では TL が教育現場でどのように使用されているかについて探したが、EMIにおける学生の教室外での学習時の様子と CAP における教員の工夫の実態については探り切れなかった。今後の課題である。

引用文献(本科研成果物として別途掲載済みのものを除く)

- Baker, C. (2006). *Foundations of bilingual education and bilingualism, 4th edition*. Multilingual Matters.
- Cenoz, J., & Gorter, D. (2017). Minority languages and sustainable translanguaging: Threat or opportunity? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 38(10), 901-912. <https://doi.org/10.1080/01434632.2017.1284855>
- Doiz, A., Lasagabaster, D., & Sierra, J. M. (eds.).(2013). *English-Medium Instruction at Universities: Global Challenges*. Multilingual Matters.
- García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.
- 加納なおみ(2016)「トランス・ランゲージングを考える 多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』12, 1-22.
- Li, W. (2018). Translanguaging as a practical theory of language. *Applied Linguistics*, 39(1), 9-30. <https://doi.org/10.1093/applin/amx039>
- MacSwan, J. (2017). A multilingual perspective on translanguaging. *American Educational Research Journal*, 54(1), 167-201. <https://doi.org/10.3102/0002831216683935>
- MacSwan, J. (2020). Translanguaging, language ontology, and civil rights. *World Englishes*, 39(2), 321-333. <https://doi.org/10.1111/weng.12464>
- Manakul, W. (2007). Role of English in internationalization of higher education: The case of the Graduate School of Engineering, Hokkaido University. *Higher Education and Lifelong Learning*, 15, 155-162.
- Otheguy, R. García, O., & Reid, W. (2015). Clarifying translanguaging and deconstructing named languages: A perspective from linguistics. *Applied Linguistics Review*, 6(3), 281-307. <https://doi.org/10.1515/applirev-2015-0014>
- Poza, L. (2017). Translanguaging: Definitions, implications, and further needs in burgeoning inquiry. *Berkeley Review of Education*, 6(2), 101-128. <https://doi.org/10.5070/B86110060>
- Vila, F. X., & Bretxa, V. (2014). *Language policy in higher education: The case of medium-size languages* (Vol. 158). Multilingual Matters.
- Williams, C. (1996). Secondary education: Teaching in the bilingual situation. In C. Williams, G. Lewis, & C. Baker (Eds.), *The language policy: Taking stock*, (Vol.12, pp. 193-211). CAI

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 湯川笑子・清田淳子	4. 巻 17
2. 論文標題 立命館キャンパスアジア・プログラム日本人学生の日中韓3言語および英語が関わるトランス・ランゲージング	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)研究	6. 最初と最後の頁 123-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯川笑子・加納なおみ	4. 巻 17
2. 論文標題 「トランス・ランゲージング」再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB)研究	6. 最初と最後の頁 52-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukawa, Emiko	4. 巻 27, Issue4.1
2. 論文標題 Local and foreign students' views of English-Medium Instruction (EMI) and the use of multiple languages for learning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Asian EFL Journal	6. 最初と最後の頁 49-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯川笑子・清田淳子	4. 巻 16
2. 論文標題 立命館キャンパスアジア・プログラム生はどのように マルチリンガルに育ったのか -移動キャンパス2年 目終了後の自己評価にもとづく言語能力・言語使用状況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究	6. 最初と最後の頁 24-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯川笑子・清田淳子	4. 巻 50
2. 論文標題 常設化キャンパスアジア・プログラムにおける日中韓3言語の発達と使用 移動キャンパス1年目終了時	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukawa, Emiko & Horie, Miki	4. 巻 18
2. 論文標題 Local Students' Views of English-Medium Courses in a Japanese Context	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Ritsumeikan Higher Educational Studies	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 庵途由香	4. 巻 18
2. 論文標題 東アジア共同運営高等教育プログラム構築の試み 立命館大学文学部キャンパスアジア・プログラムの事例	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館高等教育研究	6. 最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 湯川笑子・清田淳子・庵途由香
2. 発表標題 立命館キャンパスアジア・プログラム学生はどのようにマルチリンガルに育ったのかーカリキュラム、成果、意義
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Emiko YUKAWA
2. 発表標題 50 strategies that two Japanese professors used in transitional English-medium(EMI) courses
3. 学会等名 American Association of Applied Linguistics 2019 Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 湯川笑子・清田淳子
2. 発表標題 日中韓キャンパスアジア・プログラム学生のトランス・ランゲージング
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 湯川笑子・堀江未来
2. 発表標題 大学英語科目開講 (EMI) における多言語使用
3. 学会等名 異文化間教育学会第38回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yukawa, Emiko
2. 発表標題 Local and foreign students' views of English-medium courses: A Japanese context
3. 学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Yukawa, Emiko, and Horie, Miki
2. 発表標題 Students' attitudes toward English-medium courses: A Japanese context
3. 学会等名 15th AsiaTEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yukawa, Emiko, and Horie, Miki
2. 発表標題 Transitional EMI in a Japanese University: Challenges and Possibilities
3. 学会等名 Symposium: English-Medium Instruction in Asia (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 湯川笑子
2. 発表標題 トランス・ランゲージング その概念と外国語教育における意義
3. 学会等名 日本ロシア語教育学会第1回研究大会(招待講演)(招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>湯川笑子(2022)『EMIハンドブックー初めてEMI授業を受講する学生のために有効な40のストラテジーー 40 Effective Pedagogical Strategies for Students Taking English-Medium Courses for the First Time』あおぞら印刷 全85頁</p> <p>湯川笑子・清田淳子・庵途由香(編著)(2022)『多言語学習ハンドブックーキャンパスアジア・プログラム生と全ての多言語学習者のためにー』あおぞら印刷 全57頁  <a href="http://www.ritsumeai.ac.jp/campusasia/publicity/">http://www.ritsumeai.ac.jp/campusasia/publicity/</a></p>
--

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	清田 淳子  (KIYOTA JUNKO)  (30401582)	立命館大学・文学部・教授    (34315)	
研究分担者	庵澄 由香  (ANZAKO YUKA)  (70460714)	立命館大学・文学部・教授    (34315)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Symposium: English-Medium Instruction in Asia	開催年 2017年～2017年
---	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関